

# 錢稻孫訳一九五九年版『漢訳万葉集選』の成立経緯

——佐佐木信綱宛錢稻孫未発表書簡十二通、鈴木虎雄書簡一通——

鄒 双双

一九五九年三月、世界初の纏まった万葉歌の漢訳『漢訳万葉集選』が日本学術振興会によって日本で出版された。「中国の詩としても美しい限りである」と高く評価された。訳者は錢稻孫である。

錢稻孫は、一八八七年中国浙江興に生まれ、一九〇〇年留日学生監督として東京に赴任する父錢恂と共に来日し、慶応義塾幼稚舎、成城学校（現成城中学校・高等学校）や東京高等師範学校（現筑波大学の一部）で七年間教育を受けた。その後、イタリアに留学し、一九一〇年帰国後、中華民国の教育部に勤務し、清華大学や北京大学で日本語を授けた。二十世紀二十年代から、熟練した日本語を活用し、文学、文化、政治、医学など多岐に亘る日本語作品を数多く中国語に訳し、紹介した。日本文学に対するまともな関心と尊敬という点では、周作人と比

肩して先達とされている。<sup>2</sup>一九六六年歿する。管見に入った限りでは、錢稻孫が『万葉集』の漢訳を雑誌に公開するようになったのは一九三七年からであった。

錢稻孫の万葉集漢訳活動および『漢訳万葉集選』の出版は、佐佐木信綱と深く関わっていた。佐佐木信綱は、歌人にして国文学者である。一八七二年に国学者の父弘綱の長男として三重県石葉師に生まれた。歌人として活躍し、『思草』（一九〇三年十月、博文館）、『新月』（一九二二年十一月、博文館）など十二巻の歌集を残した一方、万葉集研究者としても甚大な成果を挙げた。『評釈万葉集』（一九四八年十一月—一九五四年九月、六興出版社）、『万葉辞典』（一九五二年十二月、有朋堂）など著作がある。

『漢訳万葉集選』をめぐる諸問題はまた別稿で詳しく論じる

が、ここで、簡単に『漢訳万葉集選』が成立に至るまでの流れ

を纏めることにする。佐佐木信綱は、『万葉集』を世界中に弘布しようとする思いから、一九四〇年に友人の杉栄三郎<sup>3</sup>を通して、錢稻孫に万葉集の漢訳を依頼した。同時に翻訳の手助けに日本の万葉集解説や図録などの参考資料を提供し、錢稻孫が訳すにあたって生じた難題の解決に協力した。巻ごとに出来上がれば、市村瓊次郎が校閲するということとなった。ところが、戦争情勢の変化により一九四五年から佐佐木信綱と錢稻孫は連絡が取れなくなった。絶えた音信が再び通じるようになったのは五十年代以降である。郵送途中で一部分の訳稿が紛失したことが分かった。その時市村瓊次郎が既に他界していたため、鈴木虎雄が校閲の役目を担った。また、『漢訳万葉集選』収録の佐佐木信綱の『漢訳万葉集選縁起』によれば、出版に際して吉川幸次郎は幹旋に尽力した。北京滞在中錢稻孫の家に寄寓したことのある、当時京都大学人文科学研究所助教授を務めている平岡武夫も校正について協力を尽くしたという。翻訳や出版にあたる費用は、それぞれ中日文化協会、日本学術振興会の補助によって賄われた。こうして幾人かの努力によって、錢稻孫の漢訳は、紆余曲折を経ながら、やっとのこと一九五九年に『漢訳万葉集選』

という形で世に出た。

ここで紹介する佐佐木信綱宛て錢稻孫の未発表書簡十一通、はがき一通は、一九四〇年から『漢訳万葉集選』出版直前の一九五八年に至るまでの二十年近くに亘って、絶え絶えでありながら、『漢訳万葉集選』の成立までの経緯を如実に語っている。

また、これらの書簡は『漢訳万葉集選』の成立経緯を明かす手がかりになるだけではなく、国を異にした佐佐木信綱と錢稻孫が『万葉集』の弘布と伝播に取り組むという相共通する姿勢を示す動かない物証ともなっている。『漢訳万葉集選』はまさに国境を超え、戦争という時代背景をも克服した努力の結晶といえる。その意味では、書簡も『漢訳万葉集選』も日中交流の一事例を物語っていると見ても差し支えないであろう。

佐佐木信綱宛錢稻孫の書簡のほか、漢訳の校閲を担当した鈴木虎雄の佐佐木信綱宛の一通も紹介したい。これは、鈴木虎雄が佐佐木信綱の送ってきた錢稻孫の序文を見て送り返すとの内容である。『漢訳万葉集選』にも関連しているため、封筒がなくて本文しかないが、十三通目として掲げたい。

磯上知里をはじめとする佐佐木信綱記念館の職員の方々の御協力と御好意により、ここに紹介できますことを衷心より感謝し、厚くお礼を申し上げます。

なお、判読できない箇所は□と表記する。

一一九四〇年十月一日（消印 北京／十月一日）／中華民國北京西城受壁胡同九より／日本東京本郷区西片町十番地／佐佐木信綱宛（封書）便箋一枚 五分

拝啓 漸く深くなりゆく秋の燈火愈々親しく感ぜられ候 先生には杖履益々御健かに渡らせらむ奉慶賀候 先月杉先生当地に見へて 先生よりの御惠贈書拝領 早速文集に見ゆる 第一篇を写し取りて昨今日本文読本に当て学生と共に講読致し居り候 その節杉先生より色々萬葉詠の件に就き承はりて一代の光榮と存じ候 ただ不学不文果して訳し終せらるゝやを虞れ居り候 昨日又杉先生より書簡賜はれ 愈々心得固めて努め見む何卒隨時御指導御鞭撻賜はれ度奉願候 此の段奉申候

十月一日 錢稻孫

竹柏園先生 左右

二一九四一年一月四日（消印 北京／一月四日）／中華民國北京受壁胡同九 より／日本東京本郷西片町十八 一六／佐佐木信綱宛（封書）便箋一枚 五分

拝啓 新口奉祝 歳首も一日のみ休暇 何かと気分出です候 今朝短歌三首訳出 字数を多く致す試に候

七 額田王歌 昔之日冠駕 蹕在金野 苒彼薄華 茸我假舍  
今我猶思 宇治之夜

八 額田王歌 駕言乘舟 熟田之津 待月既明 汐泊泊乎  
海濱 鼓樹迺矣 今當其時仁

一〇 中皇女命往于紀伊温泉之時御歌 願ト君寿 亦ト我修  
莘莘有草 磐代之丘 來結彼根 長同斯休

一月四日

錢稻孫

竹柏園先生

三 一九四一年二月八日（封筒欠）便箋一枚

拝啓

御書翰忝く拝誦仕り 茲に簡單なる報告紹介を綴り 同封仕置候 延引の龜平に御免被為遊度候 訳の方卷三を終へ清書出来次第呈上可仕候 卷四以降の番号御指示被下度願上候 註として訳すべき資料全部御送付願へば便利に存じ候

二月八日

稻孫

竹柏先生

四 一九四一年二月一〇日（消印 北京／三十年・二月・十日）／中華民國北京西城受壁胡同九より／日本東京本郷区西片町十

番地八の一の十六／佐佐木信綱宛（封書）便箋一枚 一〇分

拝啓 昨日航空便にて申上げたる通り 第三巻御指定の歌を全部訳了 清書に付し一週間を出でずして郵送可仕候 それ以降の歌番号御知らせ被下度 漸次版稿の体裁なども考ふべきかに存ぜられ 原文としては定本に準じては如何に候や 昨年定本第一巻頂戴致しあり候へども 第二巻以降御出版に相成られ候や 訳稿に付き市村先生より何か御注意無之候や 三四月頃には上京の機会有之べく候得共 その間にも一二巻訳を進め度く存じ候間 御多忙中 恐れ多く候へども 至急御指示あらむこと偏に冀上候 先般南京より中根領事見え 御計画拝見致し候 如何なる方法を取らるゝも異存ハ無之 たゞたゞ早く纏めんこと考へ居り候 先づ右用件のみ

頓首

錢稻孫

二月十日

竹柏園先生

硯此

五一 一九四一年二月二十八日（消印 北京／三十年・二月・廿八）／中華民國北京西城受壁胡同九より／日本東京本郷区西片町／佐佐木信綱宛／（封書）便箋一枚 八分

拝啓 昨日御書翰に相次ぎ 萬葉図録一部御惠賜被下難有く拝受仕り候 厚く御礼申上ケ度候 拙稿まで御取上げ被下よなき光榮に存じ候処 恐惶深く存じ候 未だ僅訳せるのみ果して訳し得たりやも疑はしきにはや 御取上被遊候上を只々努力可仕存じ候 先般郵便を以つて巻三の訳稿に差上候相届き候や 今後訳すべき歌御選定願度候 先づ御礼傍々御伺ひ申候

稲孫頓首上

二月二十七日

竹柏園先生

侍右

六一 一九四二年正月十五日（消印 北京／42・1・16）／砂灘松公府夹道大号 国立北京大学総監督辦公室より／日本東京本郷区西片町一〇／佐佐木信綱宛／（封書）便箋一枚 十一角一分

拝啓 久々御無音に打過ぎ 誠に申訳無之候 昨年萬葉歌典難有拝領致し その節一書差上候 今年元旦より日日訳事相努め 目下巻の十一までの選出歌全部訳了されば 未だ御目に掛けざる訳稿四十三首有之 何れ御仰通り 謄写刷六七部作

りて送上ぐべく候 御手簡開示の件々拝承仕り候 何等意見も  
無之 凡べて宜しきやう御取定め被下度願上候 訳につきては  
特に御注意の点々仰せられ戴けば 日本語訳なくとも宜しく候  
定本の二以下刊出せられたりや 当地にて「惟神道」<sup>8</sup>てふ雑誌  
創刊せられ それに防人歌十首ばかり 詩経調以つて訳載致し  
候 この種防人歌をも興ずるまま訳し行く心得に候 現在まで  
三十余首既訳のこと、相成り候 たゞ昨年以來授業も少し増加  
の上 事務取り居るため まゝならぬが多かれど 萬葉だけは  
塵積み行く堅き心構に居り候 もし文化協議会京都にて開催の  
こととならば 春渡来の機に御目もじ出来候 竊に楽しみ居り  
候 誠に草卒失礼に候へども 御寛宥の程願上候

正月十五日 錢稻孫

佐佐木先生 侍史

室人御奥様始め皆々様に宜敷申上よう申出で候

七 一九四四年一月十九日（消印不明）／中華民国北京受璧胡  
同九より／日本東京本郷区西片町一〇／佐佐木信綱宛（封書）  
便箋一枚 八分

拝啓 陳者昨今卷一三の三三四二を解説致したる所 この歌  
は色々難解の点ありてその心会得不仕 御教示を願上度候 略

儀御免被下度候

一月十九日

錢稻孫

佐々木信綱先生

八 一九四四年二月三日（消印 北京／19・2・3<sup>10</sup>）／中華  
民国北京西城受璧胡同九より／日本東京本郷西片町一〇／佐佐  
木信綱宛（封書）便箋一枚 八分

拝啓 春風料峭之砌 愈々杖俊康強奉大慶候 陳者先月一書  
呈上仕り候 自來萬葉歌訳八十首ばかり出来 只今卷十六に入  
り候 竹取翁<sup>11</sup>の歌誠に難解を極め候 その口語訳賜はれ度願上  
候 概説の原稿も御下付可有之待上申候 杉先生より玉章被下  
御返事いまだ申上げず 罷在り候へども 訳の方は今年に入り  
て相勉居り候 今年中には全部訳了の心掛に御座候 先づ右御  
願ひのみ  
頓首

錢稻孫

竹柏園先生 侍史

九<sup>12</sup> 一九五五年十二月十五日（消印 北京／55・12・1  
5／日本／55・12・21）／中国北京西四受璧胡同九号よ

り／日本熱海市西山／佐佐木信綱宛（封書 航空便） 便箋一枚  
九〇圓

拝啓

秋なかばから胸を病みての籠居に 思ひまうけぬ遙々海原の  
かなたより懐かしきおん音信 嬉しさのあまり 拝誦の目も曇  
りぬ わけて御親筆の落款つらつら眺め入りて十幾年かのむか  
し偲ばれ候 熱海にうつらせられ また奥様の御他界遊ばせら  
れし御事のかずかず只今承はりて 誠に久しくも遠ざかりしこ  
とといったく心打たれ候 さりながら 先生に於かれてハ 御著  
作にいそしまれ 奈良あたりおん旅遊ばせらるる由 翌鏝に渡  
らせらるる御あり様伺ひまつりて欣喜之至に存じ 益々御清健  
奉上祈候 晩生も七十の齡を迎ふるやうに相成り 平和後三ヶ  
年の鉄窓生活を過ごして家財蔵書残りなく取り上げられたれど  
北京解放とともに自由の身に返り 人民衛生出版社の編輯に加  
は、りてここ五ヶ年に相成り候 乏しきかぎりなれど 余日も  
多からざらむ者病の身に取立てハ未だ幸多きかたと悟りあきら  
め罷在候

曇つとしお選上萬葉集訳稿に不着の部分の有之ハ 誠に遺憾  
千萬 蔵書その他悉く押収されたる今日 更らに補訳も困難と  
いらだち 竭力處りに埋れたる反古など拂ひ捜しけるにあな難

有や 御示の目錄に照しあはせて兎に角補ふべき部分見付かり  
申し候 幸ひに病休の身の昨今明日からとも躬ら写し出さむ心  
得に御座候 鈴木豹軒先生<sup>15</sup>に是正願はるれバ 忝けなく存じ  
一日も早く出版の運びにならむことこひ望み候ハ 近頃ことの  
ほか 時の駒ありし稲妻もたゞならぬと痛感仕り候へば候 序  
言緒言の筆はいくたびか取りしも物ならずしてしまひ 今は如  
何せむかとただただ惑は居り候 お国にて出版なれど省いても  
と存じ候へども もしも出版ともなりたる暁ハ数部恵まれ度願  
上候 先づハ右お知らせのみ

敬具

一九五五年十二月十五日

錢稻孫

佐佐木信綱先生

執事

十一九五八年五月十四日（消印 北京／58・5・14）／  
中華人民共和国北京 西四受壁胡同9号より／日本熱海市西山  
竹柏会内 野村望東尼全集刊行会／佐佐木信綱宛（ハガキ）□  
分

拝啓 昨日忝なく

野村望東尼全集 一部御送付に預り 雖有御礼申し候。<sup>15</sup>

五月十四日

錢稻孫

十一 一九五八年八月三〇日（消印 58・8・30）中華人

民共和国北京西四区 受璧胡同九より／日本熱海市西山／佐々

木信綱博士 侍史／佐佐木信綱宛（封書）便箋三枚 五角二分

拝啓 昨今当地ハ遽かに涼しく相成 いよいよ秋に入り候

今年御地別して暑かりし様に側聞致し候ところ 先生に於かれ

て益々御著述に専意被相為候由承り 敬佩と同時に欣賞に勝へず

候 さて 八月二十六日に先生より御書簡並びに鈴木先生より

御丁寧なる御手紙萬葉訳稿も正に落手仕り候 直ちに御指教に

より改訂いたし 今日凡べて航空便以つて差出し置候

御示しの秀名など少しも異議無之候 たゞ氏名の上北京のみ

冠するよりも「中国」と置かれてハと存じ候へども 強てのお

願にハ決して無之候

（誌）

当地「訳文」といふ月刊雑誌の八月号に萬葉訳之有 選りだ

し源氏桐壺一帖をや、古き口語に訳して出し申し候 漸次貴国

古典に興味を感じ初めたる様に見受けられ候 益々小生儀学力

不足を痛感致し候

源氏についてハ池田氏大成 島津氏の講話 及び谷崎氏の新

訳を参考にとり読申居候 往年日本歴史に関するもの有職故実

など数多参考書持合せしも 今日ハ凡べてなくし殊に貴国最近

の解釈研究方法など可成相変り 新しきもの目に入りがたくて

萬葉訳もし平凡社より出版のことになる際 同社のポケット百

科なり一部頂き度存じ候 尚ほ 難訓辞典のよろしきものあ

らバ御知らせ願ひ 送金方法を考へて購ひ度く候 新刊書目な

ど偶に目を通せば垂涎萬丈のもの訳に有之る、送金の方法ま

たその力にも余ることとて諦むるより余儀無之 辛き世に御座

候 先づ右御報告 方々深く御礼申上度候

頓首

八月三十日

錢稻孫

竹柏園先生 侍史

十二 封筒のみ

一九四〇年一月十一日（消印 北京／29・1・11）中華民

国北京受璧胡同九より／日本東京本郷西片町一〇 八十六／

佐々木信綱先生／佐佐木信綱宛／五分

十三

冬季御安泰を賀し奉り候。錢氏序文再び郵寄被下拝見致し候。

疑問候の点を附記して拝呈致候。

書留との御ことに候得ども、間は隔たり居り候且明写外に候

間、早々速達にて拝呈致し候。

本日付御入都被遊ざるよし送り越し存候。

向寒御自玉切祈りいたし候。不一。

丙申十一月二十九日 夕 虎雄

竹柏園大人

高梧下

〔注〕

(1) 吉川幸次郎「跋」(『漢訳万葉集選』、一九五九年三月三十一日、日本学術振興会、一九七頁)

(2) 吉川幸次郎「跋」(『漢訳万葉集選』、一九五九年三月三十一日、日本学術振興会、一九三頁)

(3) 杉栄三郎(一八七三—一九六五)、岡山出身、東京大学卒業。一九〇二年清朝京師大学堂(北京大学の前身)教習となる。一九一八年宮内省記官、づいで宮内省図書館頭。一九三九年退官後宮中顧問官を務める。

(4) 佐佐木信綱「漢訳万葉集選縁起」(『漢訳万葉集選』、一九五九年三月三十一日、日本学術振興会、一八七頁)

(5) 杉先生・杉栄三郎。佐佐木信綱「錢稻孫と万葉集」(『東京朝日新聞』一九四二年十一月一日)に「支那における和歌

の訳は、夙く全浙兵制の日本風土記第三に、歌謡三十九首が訳されているが、その中には万葉集の歌は入つてをらぬ。わづかに近年にいたつて数篇の訳があるに過ぎぬのである。それで、杉栄三郎博士の紹介で、錢稻孫君に万葉の秀歌三百篇の漢訳を委嘱することとした」とある。

(6) 市村先生・市村瓚次郎(一八六四—一九四七)。佐佐木信綱「漢訳万葉集縁起」(『漢訳万葉集選』日本学術振興会、一九五九年三月)「漢訳には市村瓚次郎博士、独訳には木村謹治博士に校閲してもらふこととそれぞれ両君の快諾を得た。(略)自分が錢君の消息を再び聞きて交通が開かれると、間もなく錢君は完成した原稿を送つてこられた。自分は喜してこれ待ち迎へたが、市村博士はすでになくなつてをられた」という記述がある。

(7) 萬葉図録・佐佐木信綱、新村出著「萬葉図録・文献篇地理篇」(靖文社、一九四〇年十一月)「萬葉図録・文献篇地理篇解説」(靖文社、一九四〇年十二月)。「萬葉図録・文献篇地理篇解説」に「万葉集の支那語訳は従来殆どなく、断片的に雑誌に発表されたに過ぎなかつたが、最近錢稻孫(Chen Taosun)によつて、選訳が着手された。(略)」というふう

に錢稻孫のことが触れられている。「萬葉図録・文献篇地理



篇」に「錢稻孫 萬葉集選譯稿本」と題する写真一枚が収録されている。すなわち、『萬葉圖録』出版以前から、佐佐木信綱は、既に錢稻孫のことを知り、その原稿も入手していた。

(8) 「惟神道」…皇典講究所華北総署の月刊機関誌である。一九四一年十二月に北京で創刊された。創刊号に錢稻孫の「萬葉歌譯漢」が掲載されている。『萬葉集』卷二十の第四三二一首から第四三三〇首までの十首の翻譯である。しかし、『漢訳萬葉集選』には、第四三二五、四三三七、四三三八首しか収録されていない。

(9) 文化協議会…東亜文化協議会と思われる。東亜文化協議会は、一九三八年北京で成立大会が開催され、その年の十二月一日から五日まで東京帝国大学で第一回評議員総会があった。一九四一年四月十一、十二日に京都で東亜文化協議会文学部会が行われ、錢稻孫は周作人と共に東亜文化協議会評議員代表として参加した。一九四二年には、錢稻孫が想定した東亜文化協議会文学会がなかった。代わりに十一月に第一回東亜文学者大会が開会され、錢稻孫は参加した。

(10) 消印の「19・2・3」は昭和十九年二月三日と思われる。当時北京は日本によってしばらく統治されていたため、昭和の年号が北京においては使用されたと考えられる。そうでな

ければ、民国十九年（一九三〇年）、あるいは一九一九年と考えては、辻褄が合わない。

(11) 竹取翁…『萬葉集』第三七九一首の長歌である。

(12) この書簡は、錢稻孫と佐佐木信綱は消息が絶えて以来の最初文通と考えられる。

(13) 一九四八年十月、佐佐木信綱の妻である佐佐木雪子が歿す。享年七十五。

(14) 鈴木豹軒…鈴木虎雄。前掲佐佐木信綱「漢訳萬葉集選緣起」に「錢君は完成した原稿を送つてこられた。自分は欣喜してこれを迎へたが、市村博士はすでに亡くなつてをられたので、豹軒鈴木虎雄博士に請うて、全編に博士の意見を付して北京に返送した」という。

(15) 『野村望東尼全集』…佐佐木信綱編、野村望東尼全集刊行会によつて一九五八年四月に出版された。佐佐木信綱「作家八十二年」（毎日新聞社、一九五八年五月二十五日）には「昭和三十三年 八十七歳 四月 野村望東尼全集が、安川、松本、麻生、貝島氏の厚意によつて、世に出ることになった」が書いてある。

(16) 「訳文」は中国国内で外国語文学を紹介する権威ある雑誌で、後に「世界文学」と改称された。一九五八年八月号には、

錢稻孫の「万葉集選訳」「源氏物語選訳」が掲載されている。錢稻孫は「源氏物語」の翻訳に取り組んだが、原稿は文化大革命を経て全部紛失した。定稿は五章もあったという。谷崎潤一郎の鮑耀明宛の書簡（一九五九年九月二十九日）にも「源氏物語の漢訳は前に錢稻孫のものが出ている筈と思いますが、それとは別に又新しい訳がでるのは喜ばしいことであります」とあるように、錢稻孫が言及されている。

（17） 池田氏大成・『源氏物語大成』。池田亀鑑による源氏物語の校異を中心にした研究書である。一九五三年六月から一九五六年十二月にかけて中央公論社によつて出版された。島津氏の講話・島津久基『対訳 源氏物語講話』（中興館、一九三〇年十一月二十五日）。谷崎氏の新訳・『潤一郎新訳源氏物語』（中央公論社、一九五一年五月～一九五三年十二月）

（すう） そうそう／本学大学院生